

【第17回庭野平和賞受賞式記念講演】

21世紀に向けての宗教の役割

姜元龍（カン・ウォンヨン）師

新たな千年期、新しい世紀が始まる西暦2000年に、第17回庭野平和賞が授与されることは私にとってこの上ない名誉であり、かつ大変光栄に存じます。庭野平和財団の皆様はじめ関係者の皆様に真心より感謝申し上げます。私がこの受賞を感謝と新たな使命感を持って受け入れた理由をはじめに申し上げたいと思います。

まず第一の理由として、この賞は、私が心よりご尊敬申し上げる故庭野日敬先生のお名前が冠された賞であるためです。庭野開祖先生は、敬虔かつ開かれた仏教徒として、人類の平和実現のため全力を尽くされました。1970年の世界宗教者平和会議(WCRP)創立に深く関わられて以来、アジア宗教者平和会議(ACRP)の創立、さらに、仏教徒として国際宗教自由連盟(IARF)の活動にも新たな局面を開かれました。これらの活動を通じ、庭野開祖先生は全世界の各宗教に、世界平和実現と人類文化高揚のため宗教協力による具体的実践の道をお開きになりました。

私はキリスト教徒ではありますが、庭野先生の開かれた道を歩むものとして、韓国、アジア、世界の中で、庭野先生の心を体して活動してまいりました。その私にとって、今回の受賞は大変意義深くかつ非常に光栄であります。

第二の理由として、この賞が日本の仏教者が設立した財団から、韓国人のキリスト教徒である私に授与されたことは意義深いことであると考えます。

36年間日本の植民地支配を経験した韓国人には、最も近い国である日本に対して、心からの平和は未だ実現していないまま、心に高い氷壁が残っているのが現実です。しかし、新しい千年期、新しい世紀を迎えた今、両国民は心からの和解を一刻も早く実現し、東アジア、ひいては世界平和のために協力していかなければならない使命を担っていると思います。

そして、韓日間の平和協力のためには、両国のキリスト教徒と仏教徒の協力が必ず実現されねばなりません。それぞれの国において、これらの宗教は大きな影響力を持っていますので、他の宗教と協力しつつ両国の宗教者の信頼・協力関係をさらに強固なものとし、その基盤の上に日韓両国の真の平和協力をうち立てるべく努力する使命があると確信しております。

この様な意味において、今回の私の受賞は象徴的かつ大きな意義があると思われれます。受賞者である私個人は微力な存在ではありますが、今日まで私と力強く協力して下さったアジア、世界各地の仲間、特に韓国内の同僚とこの光栄を分かち合い世界平和、特に東北

アジア地域の平和実現のための努力を通して、今回の受賞にお応えしたいと思います。

それでは、これから私の記念講演に移らせていただきます。

過去において、平和は全人類が希求する目標であり、またすべての宗教が追求する共通の規範でありました。21世紀においても、平和は人類にとって最大の関心事であり続けるでありましょう。平和を求める活動の手段としての諸宗教の協力と平和に関する共通の理解が、この意味で不可欠であります。

平和という言葉は、ギリシャ(Greece)語ではエイレネ(Eirene)で、それは対決、戦争などがない状態を云う消極的な意味を表すものですが、ユダヤ・キリストの経典である旧約聖書では、ヘブライ(Hebrew)語でシャローム(Shalom)が平和です。シャロームはエイレネに比べて積極的、創造的、総合的な内容を含んでいます。内面の平和、魂の平和、天上の平和と共に、またそれを越えて地上の平和すべてと関係する意味で神と人間、人間と人間、人間と被造物との正しい関係を回復することを意味します。したがって、平和実現の努力は戦争、対決の防止と終結だけでなく、正しい関係を害するさまざまな問題、例えば貧富の格差、人種差別・性差別、環境破壊などの問題を解消することにも向けられます。

過去において、多くの宗教戦争が、特にイスラム教、ユダヤ教、キリスト教の間で行われました。そして、21世紀を迎える現在でも、多くの宗教紛争が世界中の生命を脅かし、諸文明を支配し続けています。過去における宗教紛争の恐ろしい歴史に鑑みると、文明は将来も衝突を続けるかのようです。今こそ、紛争と戦争の歴史を平和的共存の未来に転換するために我々がなにを為し得るかを深く考える時であり、かつこの転換の過程において諸宗教が果たすべき役割を問いかける時でもあります。私は、平和を促進するためにはこの方向転換を“閉ざされた宗教”から“開かれた宗教”になることから始めるべきであると考えます。21世紀においては、“閉ざされた宗教”の持つ排他独善性は、文明間の衝突を加速するでしょう。しかし、“開かれた宗教”が、悲劇的な衝突を乗り越える力となり、“宇宙的霊性の時代”に我々を導く可能性が存在するのです。このような展望をもとに、諸宗教の対話と協力による平和実現のために次のような提言を行いたいと思います。

第一は、北東アジアの平和が達成されなければならないと思います。20世紀の北東アジアは、戦争による惨禍を体験しました。太平洋戦争を始め、日中戦争、中国の内戦、朝鮮動乱、中ソ国境紛争、ベトナム戦争など戦争と紛争がつづき、日本帝国主義の統治による植民地の人々の敵対感情、不信感は今も根深く残っています。従って、問題は、我々はどうすれば過去の悲しむべき歴史的遺産を清算し、相互信頼と共存の土台を築くことができるのか、という点です。

21世紀には中国は強大国になり、中国を中心とした大陸圏と日本とアメリカを中心とした海洋圏が形成され、それらの間に平和を維持することが重要になると思います。地理的にこの二つの陣営の間にある朝鮮半島は、平和的均衡の維持にとり重要となるでしよ

う。朝鮮半島は、対立をひきおこす触媒としての役割あるいは地域における平和の橋渡しの役割のどちらをも果たすことが出来ると思います。このような観点から、特に、日本および中国の宗教者の皆様に、南北朝鮮が平和的に統一され、朝鮮半島における冷戦の終結が実現するよう、最大限のご援助を賜りますようお願い申し上げます。宗教指導者と一般の方々が最大限の努力をされると同時に、韓日両国政府が経済的、政治的課題について協力することが必要です。ともに働くことによって、これらの努力が南北朝鮮の再統一への道を開くでしょう。この目標を達成するためには、人道的な愛の実践を通じて相互信頼関係を促進し、今の氷壁を崩し、現在の非対称的関係を対称的関係に変える努力をつづけることが必要です。朝鮮半島の平和統一を橋として、北東アジアにおける平和は現実的目標となります。宗教は、北東アジアの再構築において重要な役割を果たすものと確信しています。歴史的に、北東アジアは様々な宗教のすばらしい出会いと混交の場でありました。そこで、インドで発生した仏教と地中海で発生したキリスト教は、北東アジアの伝統宗教である儒教、道教、シャーマニズムと出会いました。このように多様な宗教がひきおこす相互作用の相乗効果と創造的な組合わせが、宗教的多元化の時代における新しい文化の形成に貢献することは明白であろうと思います。

第二の課題は、‘反生命’に関する問題です。1993年、シカゴで開催された世界宗教会議(Parliament of World Religions)シカゴ大会において、(百年ごとに開かれるこの大会が、次に開催される)2093年までには地球上の全生命が絶滅してしまうだろうと予測し、ハンス・キュンク(Hans Küng)博士が提案した“地球倫理(Global Ethics)”を大会で採択しました。この深刻な問題を環境問題、生態系危機という言葉で表していますが、私は“生命(Life)”問題であると長年主張してきました。‘環境(Environment)’とは、西欧的思想から由来したものだと思います。それは、自然や生態系は人間を中心に、人間のために存在するという考え方です。人間にとっての有用性からのみ自然をみる人間中心の態度が、生態系を破壊する根本原因だと思います。従って、最も必要なことは、人間中心主義(Anthropo-centrism)から生命中心主義(Bio-centrism)にパラダイム・シフトをしなければならないことだと思います。

私のいう‘反生命’について、‘生命’の問題との比較で説明いたします。‘生命’の中心的課題は、人間と自然の相互依存性と相互補完性、言い換えれば、両者の関係は大変緊密で、一方の生存にもう一方の生存がかかっている状態についての目覚めです。今、地球上のすべての生命は、核兵器や化学兵器などが世界的な規模で急速に拡散するという‘反生命’の危機にさらされています。大量殺戮兵器のこのような拡散により人類は絶滅の危機に直面し、誰一人としてこの危険から逃れることはできません。このような反生命の勢力から地球上の生命を救出するためには、ある特定の地域、国家、宗教の境界をこえた問題として考え、行動する取り組みが必要であり、全世界の運動として連帯し協力していくべきだと思います。

第三の課題は、情報化時代における霊性の問題です。“情報革命”が起こり、さらに全世界に広がりつつある情報化により、人類は全ての生活領域において深遠な影響を受け、急

激な変化を経験しています。西欧で興ったルネサンス、宗教改革に続き今から約250年前におこった産業革命が、人々の生活様式を大きく変化させましたが、21世紀の情報化が継続的にもたらす急激な社会的文化的変化は、これらと比べても、はるかに大きな変化といわねばなりません。われわれ宗教者にとって影響が大きく、特に注目しなければならないいくつかの問題点について述べたいと思います。

最も重要かつ明らかな変化は、社会、政治、経済、文化のあらゆる分野において、伝統的、ピラミットの、垂直的な権力構造が衰退する一方、NGOなどの柔軟かつ有機的な市民運動が、硬直した権力構造に取って代わりつつあることです。同じ流れとして、インターネットを日常的に利用するネティズン（netizens = network + citizensの合成語）と呼ばれる人々によって作られた仮想の“インターネット教会”や“インターネット寺院”の誕生はわれわれの知るところです。情報の急激な拡散により、多数のネティズンは仮想の世界を漂流しています。人と人の直接的な交流がなくなり、人々が深い霊性を喪失し、仮想世界と現実世界の区別が曖昧になると、人間自身の自己認識の危機、社会的疎外、文化的道徳的分裂の危機という深刻な宗教的かつ現実的な問題が表面化するであります。

我々は、このような激変する社会状況にいかに対応すべきでしょうか。ポール・ティリッヒ（Paul Tillich）教授（著名な神学者）は、このような変化に対し否定的に対応する“他律（heteronomy）”的態度も肯定的に受け入れる“自律（autonomy）”的態度も、ともに正しくなく、その正しい対応策は、神の示したもう“神律（theonomy）”的生き方であり、現実を認めながら、それに含まれている否定的な要素を変化させていく態度であると提示しています。同様な意味において、激動の時代を生きる人々は、宗教を通じ、我々が必要とする霊性に多くの問いかけをすることが可能です。キリスト教でいう聖霊であれ仏教の仏性であれ、霊性は人々に日常の困難や試練を超越する力を与えるばかりでなく、人間存在の本質に目覚めさせます。従って、仮想（電脳）時代には、霊性を涵養することが、宗教のもっとも重要な役割であると思います。

20世紀が画一化の性格が強かった時代であったのに比べて、21世紀は多様性と多元化の時代が変わっていくと思いますが、自身の主体性を維持しながらその主体性の中に多様性や相違性を受け入れるべきであります。新たな世紀の霊性は、他宗教の霊的経験を受け入れて、自己の宗教的主体性を豊かにするように働くでしょう。他人との真剣な交流とこのような出会いから生まれた純粋な愛は、宗教的革新と霊性に基づく豊かで深みのある文化を創造するであります。

第四の提言として、はなはだしい富の配分の不平等の克服についてふれたいと思います。情報化社会では、単純労働の大部分を機械でやるようになるため、深刻な失業問題が発生します。結果的に中間階級の崩壊がおり、さらに貧富の格差が悪化します。このような富の配分の不平等は全世界のほとんどの国で深刻な国内問題となっています。この問題の正しい解決なしには、平和を達成することは到底不可能であると思います。

以上申し上げた問題は、氷山の一角に過ぎません。世界が複雑化し多様化するにつれて、我々に影響を及ぼす問題、例えば、人権侵害、身体障害者に対する差別・青少年の犯罪等が増加します。現代において、宗教指導者は、遺伝子工学のように技術がもたらす深い意味での問題に取り組む能力を持たねばなりません。さらなる将来を予見すると、宇宙物理学等 21 世紀におけるめざましい科学技術の発達により、人類はすでに地球時代から宇宙時代に移行しているのです。かくして、宇宙における平和維持の問題がますます重要になるでしょう。同時に、宗教的靈性は宇宙的靈性の時代の幕開けと発展に重要な役割を果たすでしょう。

以上いくつかの懸念の表明と提言をさせていただきましたが、我々にとって何よりも大切なのは、21 世紀の進展にともなう世紀のニーズに真剣に耳を傾けることであります。新たな時代に直面していくためには、現実の変化にしっかりと対処しつつ宗教的信頼の基盤を守らねばなりません。我々は、現在起こりつつある基本的なパラダイムシフトを認識する必要があると同時に、各宗教の聖典に込められた真理を、急激に変化する自身の周りの世界という文脈で把握せねばなりません。

以上の有意義かつ重大な試みに皆様の価値あるご参加をお願いしつつ、私の所見の発表を終わらせて頂きたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。